

No. 64

2016.8

世田谷文学館 ニュース

SETAGAYA LITERARY MUSEUM NEWS

館長の作家対談
鴻巣友季子(翻訳家)



北杜夫が1981年から、世田谷の自宅を領土とするミニ独立国「マンボウ・リューベリック・セタガヤ・マブゼ共和国」を「建国」したときの国旗。
「マブゼ共和国」の「大蔵大臣」喜美子夫人の手作りの品。(2015年度新収蔵品より)

収蔵品のご紹介 ムットーニのからくり劇場
2015(平成27)年度世田谷文学館事業報告

館長の作家対談

ゲスト
鴻巣友季子
(翻訳家)

聞き手
菅野昭正
(世田谷文学館館長)

6月にポーの新訳とノーベル賞作家クツェーの最新作訳書を同時刊行し、今最も活躍する翻訳家の鴻巣友季子さんをお招きして当館館長がお話を伺いました。

古典の新訳に挑戦

菅野▼鴻巣さんとお話しするのは初めてですね。本日は梅雨の晴れ間の暑い中、お越しいただいてありがとうございます。

鴻巣▼こちらこそ、お招きありがとうございます。

菅野▼鴻巣さんは様々な作品の翻訳を手がけていらっしゃるようですが、いつ頃からこのお仕事は始められたのですか？

鴻巣▼本を出す出版翻訳のお仕事は、ちょうど来年で30年です。最初に訳書を出したのは大学院2年目の時だったと思います。

菅野▼ものは何ですか？

鴻巣▼今はもう私はほとんどノンフィクションの翻訳はやっていないのですが、それは英国のBBC放送がまとめた紀行集で、世界中の川をいろいろ

ド、チャールズ・ディケンズなど、版權が切れているんだけれど意外と未訳の作品があることに気づき、すでにこのころから古典の新訳をやりたいと考えていました。しかし当時、古典を新訳するなんて野蛮なこと(笑)を考える人はあまりおりませんでした。古典というのは、一つ聖典というか、

いじつちやいけなものという考え方がありましたので。その連載を1年ぐらいやっていっているうちに、さつきの『リバー・ジャーニー』というノンフィクションの翻訳のお声がかかったんです。急ぐから、若くて時間の自由が利き、馬力のある人というので(笑)。

菅野▼馬力があるとは、お見受けしないけど、実は豊かだということですね(笑)。

鴻巣▼体力はある方だと思います(笑)。お話が回ってきて、トライアルという形で1章分を訳して出したと思います。試訳というか。

菅野▼それは初めからあなたのお名前前で刊行したのですか？

鴻巣▼そうですね。それは先生との共訳ではなくて、自分一人の単独訳書です。

菅野▼運がいいというのは褒めだけけど、我々が若い時代には学生が下訳をしても、名前が出ることはまずなかったですね。なのに、間違いを指摘されたりすると、下訳が悪いんだという話になりました。先生はどなたですか？

鴻巣▼ジョイスの研究をされていた柳瀬尚紀先生です。厳しい先生で、ほとんど何も教えてくれないうです(笑)。翻訳の世界では、旧時代の徒弟制度の最後の世代だと思います。

翻訳家になろう！

菅野▼話は戻りますが、鴻巣さんは翻訳家たらんと志したことはおありなのですか？ 先ほど最初の仕事のことを伺いましたけれど、それ以前に翻訳家として。

鴻巣▼それは私の場合ははっきりとあります。今翻訳をされている方の大半は、何となく機会があったからやっている、とおっしゃいますね。



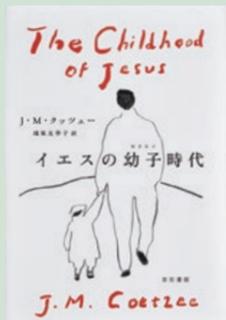
鴻巣友季子(このすゆきこ)

翻訳家。東京都生まれ。世田谷区在住。お茶の水女子大学英文科大学院修士課程在学中から翻訳の仕事を始め、ノーベル賞作家J・M・クツェーやマーガレット・アトウッドなど英語圏の現代作家の作品を翻訳、紹介すると同時に、ゼロ年代からは古典文学の新訳にも力を注ぐ。また、文芸評論家、エッセイストとしても活躍している。世田谷文学賞随筆部門選考委員。新潮新人賞、アガサ・クリスティー賞選考委員。

クツェー『恥辱』、トマス・H・クック『緋色の記憶』、ヴァージニア・ウルフ『灯台』など手がけた翻訳は60冊以上。2003年、エミリー・ブロンテ『嵐が丘』の新訳で大きな注目を集める。2015年、『風と共に去りぬ』の新訳を刊行し、現代の物語としてよみがえらせる。著書に『全身翻訳家』『翻訳教室 はじめの一步』『本の森、翻訳の泉』など多数。片岡義男との共著に『翻訳問答』、奥泉光、星野智幸ほか5人の著名人との翻訳対談を取めた『翻訳問答2 創作のヒミツ』がある。



マーガレット・ミッチェル『風と共に去りぬ』全5巻 (2015年4-7月、新潮文庫)



J・M・クツェー『イエスの幼子時代』(2016年6月、早川書房)



『ポケットマスターピース09 E・A・ポー』(2016年6月、集英社文庫)

な船やボートで旅をするというコンセプトだったんですね。

菅野▼それはテレビですか。

鴻巣▼そうですね。イギリスのテレビ番組の放送を書籍にまとめたということですね。

菅野▼僕も自分がそうですから、今そういったことをお尋ねするんだけれど。

鴻巣▼去年か一昨年、9人ぐらいの翻訳者を集めて、翻訳家になるきっかけみたいなのを聞いたインタビュー集があったのですが、自分でなりたくてなりましたと応えているのは、私と(フランス学者の)野崎敏さんだけでした(笑)。野崎さんと私だけは、なりたくてなりました。私の場合は本当にもうはつきり覚えているのですが、大学1年の冬に喫茶店で人と待ち合わせをしている時に「FOCUS」という雑誌を手にとったんですね。菅野▼知っています。スクープをねらう写真週刊誌。

菅野▼創刊したての「FOCUS」があつて、面白そうだから開いて見ていたら、そこに翻訳学校の折込広告みたいなものが入っていました。「あれ?」と思ってみると、「次の文を訳して送ってください。あなたの翻訳力を判断します」と書いてあったんです。「そうか」と、その時に私は翻訳家というのは勉強すればなるのかということに初めて思い至つて。それまでももちろん翻訳文学は大好きで読んでいましたから、翻訳家という職業があるのはもちろん分かっていましたけれど、どうやったらなれるかということを全く考えたことがなかったのに、「なに? 学校に行けばなれるのか?」と、急にそこでひらめいて「なろう!」と思つたんですね。結局、その翻訳学校には行きませんでした。

菅野▼それ以前に文学書に親しむとか、読書好きであるということはもちろんあつたわけですね。それを通過して翻訳家という見通しが出てきたという順序ですね。

鴻巣▼はい。小さい頃から本を読むのが好きで、ちよつと映画制作に熱中して脚本を書いてみたり、小説まがいみたいなものを書いてみたりはしていたんですが、どれもそんなにのめり込むというほどじゃなくて。翻訳家という職業を見た時に、これは読むのと書くのと両方できるし、非常にピンと来た。

菅野▼それは恵まれた出会いだったんですね。初

志貫徹でよかった。鴻巣▼長年続いたということは、性に合っていたのだと思います。

知らずにしみこむ翻訳文化

菅野▼翻訳家としてのキャリアを積んでこられて、翻訳家がどういうふうな仕事か評価されているとか、翻訳者の地位はどう考えられているか、そういうことについて何かご感想をお持ちになったことはありますか？

鴻巣▼「版權切れの作家たち」という連載をやったつながりて、その後「明治大正翻訳村」という連載を、また3年ぐらいやりました。

菅野▼明治大正というのは、明治時代の翻訳? 鴻巣▼そうですね。森鷗外からはじまり、二葉亭四

迷、黒岩涙香など……その連載を本にしたのが『明治大正翻訳ワンダーランド』という新書です。21、22歳ぐらいから明治と大正の翻訳と翻訳家に触れて、その時代の人たちの仕事ぶり、ほとんど狂気めいた熱意を目的にしたりして、これはすごいものだなって圧倒される気持ちで非常にありました。あの頃、翻訳家は神様のようでしたよね。森鷗外にしても、それに比べると、やっぱり現代の翻訳家って、ちよつと不甲斐ない(苦笑)。菅野▼涙香は面白い位置にいた人ですね。西洋の大文学の移植にかけては特別な場所にいたんじゃないですかね。

鴻巣▼はい、とにかく、国の知性のトップが翻訳していた時代。翻訳家は作家であり、学者だった。

菅野▼西洋のものを追いつけ追い越せの時代ですから。西洋の翻訳をする人というのは、それなりに社会的地位は認められていた。

鴻巣▼高かったですね。菅野▼文壇の中でまた別の作用があつて、創作をする人間から見ると、横のものを縦にするだけじゃないかという批判はあつた。鷗外の『即興詩人』は名訳だと言われているけれど、対立する自然主義の作家からすると、あれは外国のものを訳しているだけだということになったりしたんですね。

鴻巣▼私自身も、翻訳は創作のあくまで二次制作物だと思つています。それでも、日本は明治開国以来、他国と比べると翻訳者が大事にされてきたなと思います。翻訳家という職業が、これだけ厚遇されている国は世界でも稀で、なにしろ「名訳」とか「名訳家」という言葉があるのは日本だけと言われています。日本の翻訳書は表紙に作者の名前と並んでそれほど違わない大きさの字で訳者名を書いけていますけれど、欧米諸国の翻訳本では、訳者の名前は虫眼鏡で見ないとわからないほど小さく書かれているというジョークがあつたり、カバーに書かれなかったりなんというのも普通のことなものです。カバーに訳者の名前が書いてあると翻訳書だとはつきりわかりますから、下手をするとき置いてくれない書店が最近でもあるとか。それに比べたら日本の翻訳家はずっと大事にされて、社会的な立場を与えてもらつてきたと思えます。もちろんそれが生活的な保証にはつながってありませんけれども(笑)。やっぱり名誉とか栄誉というか、そういう意味での厚遇ですね。

菅野▼それは基本的には、日本の文化が西洋の文化を必要としているということだと思つています。ただ、そういう意識は昔より希薄になつてきていると思います。インターネットの時代で世界中の人とすぐに交信できるようになり、交通が発達して昔は40日ぐらいかかったフランスへも10時間で行ける。通信や交通事情が変わつてきたということはあるけれど、まだ日本の文化が西洋の文化の歴史的な厚みが必要としているということは、理解されていると思うのです。

鴻巣▼日本はあまりにも翻訳文化というものに依拠するところが多く、それが深く浸透しているの、むしろみんなその影響力の基大きに気がつかないんだと思うのです。翻訳文化がなくなつたらどんなことになるか。飛鳥時代に中国から漢字を入れて翻訳ということを始めた時代から、もう日本の文化が、翻訳で成り立っている事情は連綿としてあつて、最初の大翻訳時代が飛鳥から平安の漢字の移植だとすると、次が西洋との出会いである明治大正の時期で、その次の大きな転換期

がインターネットの登場ということになります。以前は、大きな言語を小さな言語がせつせと翻訳して学んだわけですが、いまは英語という巨大なグローバル言語に、小さな言語が訳されたがる。とにかく時代の変わり目に必ず翻訳が立ち現れて、もちろんそれは日本だけでなく世界中がそうですけれども、ルネッサンス期というのは、翻訳の世紀なわけですから。いまの若い人たちはもう自分たちは翻訳とか外国文学がなくて平気だと思っているのかもしれませんが、みんなの大好きなゲーム、アニメ、漫画にしても、全部外国文化にルーツがあり、翻訳を通して成り立っていると言っているようなものではないですか。



菅野▼ここでこの前、岡崎京子展をやりました。その作品の中にボリス・ヴィアンの『日々の泡』(『うたかたの日々』……)。

菅野▼岡崎作品をよく知らなかったので読みましたね、原作をきちんと捉えているという感じはしました。そういう受容の仕方が随分変わってきていると思うのですよ。昔、サブカルチャーの漫画にせよ何にせよ、西洋頼みのものももちろんあったけれど、あんなふうにエッセンスをきちんと把握して、そして枝葉がついているものはそう多くなかった。それなりに翻訳家の人たちの努力があったし、翻訳の仕事が尊重されているということもあるだろうと思うのです。ただ、日本の海外との関係は循環する。例えば、遣唐使が唐の文化を受け入れたあと、平安朝になると国風になっ

てくる。それから明の時代になると交渉が頻繁になるけれど、江戸時代に閉鎖的になりますね。そのあと明治になると西洋一辺倒で……。
 菅野▼順番、順繰りですね。
 菅野▼また今ちょっと内向きになっている。
 菅野▼そうですね。そういう傾向は多少あるのではないですか。

菅野▼現代は内向きになろうとしても、世界の情勢がならせてくれない。アメリカだって今はモノロー主義になれない。しかし、メンタリティにおいては閉鎖的に内向きになりがち傾向は、今ないわけではないですね。
 菅野▼今の若い方は相当内向きだと聞きますが。
 菅野▼国粋主義的といつても、外国を拒むわけではないけれど、妙に自足的になりやすいですね。だから、海外の文学の受容の仕

方にしても30年ほど前と随分違うと思いますね。
 菅野▼違いますね。私たちにとって外国文学は憧れとか、上のものをちょっと仰ぎ見る感じで読んでいたのが、もうそんな必要はないと思うのです。だから、もっと自然に接して読めばいいと思います。ですが、やっぱり日本人が翻訳というこのダクトを失ってしまうのは、とても危険だと思っすね。千何百年間かわかりませんが、そのダクトを抜いて私たちが生きたことはないわけですか。

翻訳は「解説しながら泳ぐ」こと

菅野▼昔は外国文学は高尚な理想だと思っ込みがあつて、難しくても読みにくくても取りついたので、海外の文学の受容の仕

読みやすい翻訳にする。
 菅野▼元から日本語で書かれているように見えるもの。それが透明な翻訳である。どっちかというと、意識に近いものもあるかもしれません。この場合のtransparency＝readability、読みやすさなんですけれど、日本人の言う透明な翻訳というのは「transparency＝fidelity」、忠実性なんです。原文がきちんと見えるように、だからよく黒子と言われます。どっちのケースもある意味、翻訳が消えると言えませんが、日本人の言っているのは、翻訳者が消える。
 菅野▼そのとおりだと思いますけれど、言語構造の違いということから来る面もあるんじゃないですかね。
 菅野▼相当あると思います。

菅野▼外国語を読む能力というのは昔より広がっているんじゃないですかね。それから翻訳家に



とつてもう一つの問題は、日本語そのものが変わってきていますね。
 菅野▼変わってきています。

菅野▼それに日本語の表現力というのが随分落ちてきていると思うのですよ。一つは漢字、漢語を読んだり書いたりする力が衰えている。国語教育のせいもあると思いますけれどね。特に抽象言語ですね。ヨーロッパのものにせよ、中国だってそうだけれど、抽象的な論文の翻訳となると、漢字漢語の表現能力がないと、なかなかうまく行かない。変なふうに砕いて訳すことはまず無理です。また、少し話が変わりますが、古典の新訳は必要でしょ

菅野▼分りにくいと、「ああ、それは私の頭が悪いからだ」と必ず思ったのですが、今はやっぱりもう同等だという意識もあるもので、ちよつとも分らないことが出てくると、すごい拒絶反応をされる。あと、読みにくいと「それは誤訳だろう」と、そこにすぐ安直に飛びつきますね。「わからない、イコール、誤訳なんじゃないの」と。
 菅野▼ただ、誤訳の問題はいつもあつて、先日あるフランスの小説の翻訳を読んでいたら、航海している最中に船員が「海があるぞ」と言う箇所が出てきました。
 菅野▼航海しているのに「海があるぞ」と。
 菅野▼日本語で読めばすぐ変だと思っすけれど、フランス語で「There is a sea」とつまり直訳すれば「海がある」という言い方がありますが、これは海が荒れているとか、波のうねりが高いとか、そういう意味になるんですね。
 菅野▼波が出てきたということですね。
 菅野▼そうですね。僕も誤訳は随分しましたから、大きなことは言えませんが、日本語で読んできおかしいなと思うのが一番困りますね。

菅野▼それは空目とか、「読み違う」じゃなくて「読み違ふ」と言っているのですが、目が勝手に読んじやうということがありませんか？ イマジネーションが暴走して。
 菅野▼その場で読み取ったつもりになつてね。
 菅野▼私は翻訳を論える時に、よくプールで泳いでいる人を想像してくださいと言っす。プールサイドに立つてその人の泳ぎぶりを解説したり、描写したり分析したりするのは翻訳者じゃない、評論家とか編集者の仕事で、では翻訳者は何をやるかという、原作者であるスイマーと一緒に横にドボンと飛び込んで、同じように水をかいて、足をバタバタさせて、要するに一つ一つの動作を自分の実体験、当事者となつてやるのが翻訳です。ただし、このプールで泳いでいると、コースをそれちやつたりすることもあ

うね。僕の先生の渡辺一夫先生の説によると、翻訳の生命は10年だと言っす。
 菅野▼賞味期限という言葉が最近よく使われますね。
 菅野▼それは日本語はどんな国語より早く変化するからだと、世界中の言語を知つておられるようなことを渡辺先生はおっしゃっていました。確かに翻訳の生命は永久のものじゃない。ですから、古いものに代えて新訳するのはいいんだけど、現代の最上の日本語にしてほしいですね。それから海外の現代小説のことですが、世界的に文学隆盛の時期とは言えない気がしますが、そんなことはありませんか？
 菅野▼質が落ちているのではないかといいことでしょうか。
 菅野▼アメリカには今ヘミングウェイやフォークナーはない。フランスでもサルトル、カミュの時代といはもうちよつとあとのヌーヴォーロマンの時代と比べると、現代の小説はそれほど文学的に質が高いとは思えないですね。そういう状況ですか、現代の文学作品を翻訳するというのは、なかなか大変なことだと思います。
 菅野▼私は今世紀に入つてから、古典の新訳と現代訳と半々ぐらいでやっているので、現代作家でどうしても訳したいという作家は、実のところそんなにいないです。私がどんな作品が出て、ついでにきたいと思うのはクツツエーと、カナダのマーガレット・アトウッドと、もうとつくに他界して作品は増えようがないですが、ポーとマーガレット・ミッチェルぐらいです。『風と共に去りぬ』はやっぱり面白い！
 菅野▼僕は映画を見ちゃったから。映画のイメージが強くてね、でも再読してみましよう。
 菅野▼(原作では)意外とスカレットが憎たらしいけれど、かわいいやつです(笑)。
 菅野▼今日は楽しいお話をありがとうございました。
 菅野▼ありがとうございます。

て、「そつちは違うよ」と客観的に言わなくちゃいけない。解説しながら泳ぐようなものですよ。と、みんなそれは無茶だという顔をするので、「そんなんです、無茶なんです。無茶だからみんな無茶にやりましよう」と翻訳教室で言う時があります(笑)。
 菅野▼そこまで意識的におやりになるとは。翻訳者として大変立派な姿勢だと思っすけれど、作者に同化するといつか、感情移入するという翻訳の仕方もありますね。僕はいつも同化するということができないんですよ。いつも何となくあ探しをしながら翻訳している。



菅野▼二番気になりますね(笑)。
 菅野▼一番気になるのは文体ですね。フランス語のこの文体を、そのまま日本語に移せるはずはないけれど、とにかくフランス語の表現の中で、どういうレヴュエルにあるかということ、何となく貧しいフランス語で判定して、似通つたレヴュエルの日本語にということを考えながらやるんですけれど、僕の場合は同化するとなつていけないですね。『ボヴァリー夫人』を訳したことがありますが、あれど、エンマ・ボヴァリーはなんて愚かなんだろうなと思っすながら訳したりするわけですね(笑)。

透明な翻訳

菅野▼「こなれた訳」という言い方があるでしょう。

資料受贈報告 | 2016年2月20日〜6月30日

- ▼岩根有希様 浦城いよ様 清水義和様 手塚敦史様 野田映史様 二日市可代様 松原慶様 峰岸了子様 山本幸久様
- ▼ARTZONE KADOKAWA NPOファックスアート 赤磐市教育委員会 アジア文化社 アートフル・アクション 阿部知二研究会 飯田市美術館 伊豆市教育委員会 社会教育課 市川市文学ミュージアム 井上靖記念館 いわき市立草野中心文学館 愛媛県生涯学習センター 絵本学会 大岡信こは館 小川未明文学館 小田原市郷土文化館 賀川豊彦記念松沢資料館 学習院大学史料館 かしま近代文学館 神奈川近代文学館 金沢文化振興財団 川崎市市民ミュージアム 北九州市立文学館 京都工芸繊維大学美術工芸資料館 くまもと文学 歴史館 慶應義塾大学アート・センター 敬燈社 江東区深川江戸資料館 神戸女学院大学 図書館 國學院大学博物館学研究室 国際芥川龍之介学会 国書刊行会 国立国会図書館国際子ども図書館 越谷市立図書館 さいたま文学館 斎藤茂吉記念館 サントリー美術館 子規庵保存会 静岡市観光交流文化局文化振興課 出版文化産業振興財団 彰国社 昭和女子大学光葉博物館 白百合女子大学言語文化研究センター 杉並区立郷土博物館 青磁社 全国文学館協議会 山台文学館 大正大学芸術文化財団 高梁比庵会事務局 高山市役所市民活動部生涯学習課 田原市博物館 たましん地域文化財団 多摩美術大学芸術人類学研究所 沖積倉 鶴岡市立藤沢周平記念館 帝國データバンク史料館 東京国立近代美術館フィルムセンター 東京都江戸東京博物館 東京都現代美術館 徳島県立文学書道館 長崎歴史文化博物館 新美南吉記念館 西尾市教育委員会 日本近代文学館 日本現代詩歌文学館 日本現代詩歌文学館振興会 ツ橋綜合財団「詩歌文学賞」事務局 日本博物館協会 沼津市芹沢光治良記念館 野田市太郎文学資料館 函館市中央図書館 姫路文学館 ふくやま文学館 ふらんす堂 ふるさと井上靖文学館 文京区立森鷗外記念館 北海道文学館 前橋文学館 松山市立立教記念博物館 宮本三郎記念美術館 遊牧社 ユーフォーブックス 横光利一文学会 立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター
- ▼「あけび」新しき村「宇宙風」「海」「海紅」がいこつ亭「風花」「カプリチオ」「寒雷」「橄欖」「空想カエ」くさくさ「九品仏川柳会句会報」群系「原型高山」現代文学史研究「鴻」「心の花」午前「埼玉文学」まつき「山河」「山曆」春餅「春燈」詩霊「端首」抒情文芸「川柳研究」タカラカン「蠶」玉川台つづれ「タルタ」短歌人「丹青」地中海「同時代」「飛火」萩原朔太郎研究会会報「SAKO」白「羽鳥通信」「翡翠」[百万塔]風「ブチ★MOND」龍「文藝軌道」文藝飯能「文藝もず」本のPark「窓」遊牧「ゆく春」[与謝野晶子の世界「ランブル」りんごの木「檸檬」の各誌ほかより資料の寄贈、ご協力いただきました。ありがとうございました。



『怪談』撮影現場で

本年、生誕100年・没後20年を迎えた映画監督・小林正樹(1916～1996)。終焉の地である世田谷で、その作品世界の全貌を当館コレクションを中心とした資料展示により紹介します。

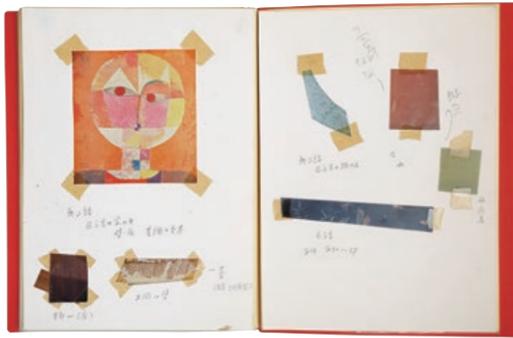
北海道小樽市に生まれた小林正樹は、早稲田大学で會津八一に師事し、東洋美術を専攻。卒業後、松竹に入社し助監督として働き始めますが、間もなく召集を受け満州に出征、宮古島で終戦を迎えました。映画に復帰後は木下恵介の助監督を務め、1952年に監督デビュー。以後、カンヌ国際映画祭審査員特別賞を受賞した『切腹』『怪談』、戦争をテーマにした全6部の超大作『人間の條件』、長編記録映画『東京裁判』等により国内外で高く評価されています。

戦争当事者として、被害者でありながら加害者である日本人の二重性を深く見つめた小林作品の重要性は、戦後70年を経てもますます高まっています。没後の大きな区切りとなる本年、本展初公開の手記など貴重な自筆資料等も交え、會津八一の教えや戦争体験に培われた小林正樹の揺るぎない信念と美意識の根源に迫ります。

生誕100年 映画監督・小林正樹
7月16日(土)～9月15日(木) 2階展示室

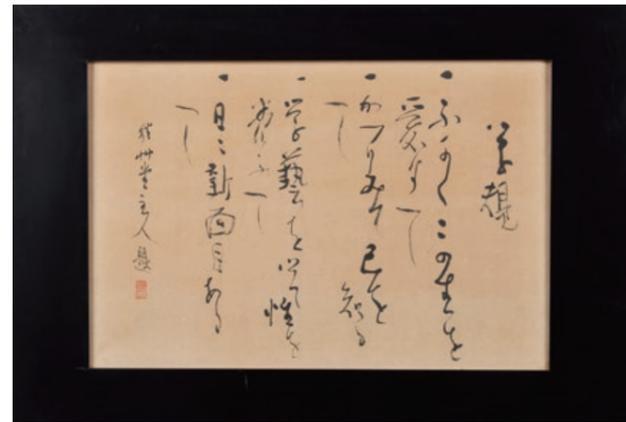
企画展

自身初のカラー作品『怪談』(1965年)の色彩イメージを構想するために作られた「色彩設計図録」

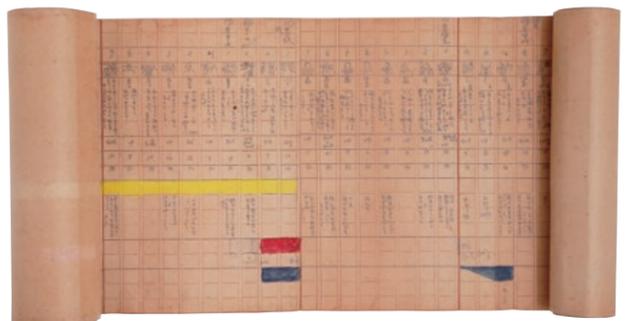


主催＝公益財団法人せたがや文化財団 世田谷文学館
特別協力＝一般社団法人小林正樹監督遺託業務世話人会・芸游会
後援＝世田谷区、世田谷区教育委員会
助成＝芸術文化振興基金

観覧料：一般800(640)円、65歳以上・高校・大学生600(480)円、小・中学生300(240)円、障害者手帳をお持ちの方400(320)円
*()内は20名以上の団体割引 *「せたがやアーツカード」割引あり
*7月22日(金)は65歳以上無料



早稲田大学卒業時に會津八一から贈られた「学規」。弟子と認められた者に書き与えられた四か条からなるこの書を、小林は生涯の指針とした。



木下組助監督時代の自作カット表(『破れ太鼓』監督：木下恵介、脚本：小林正樹、1949年)

『大岡信の詩と真実』刊行

2015年に当館で行った連続講座「大岡信の詩と真実」をもとにした書籍が、刊行されました。書店のほか、当館ミュージアムショップでも販売しております。

『大岡信の詩と真実』
2016年6月3日第1刷発行
編者＝菅野昭正
発行＝株式会社岩波書店
定価＝本体2200円＋税

「折々のうた」に示されるように、古今東西の文学に精通した大岡信氏。すぐれた詩人こそすぐれた批評家という日本文学の永い伝統を受け継ぐ、全文業の本質魅力とはどのようなものか。編者に加えて、高橋順子、野村喜和夫、谷川俊太郎、三浦雅士、長谷川權、吉増剛造といった、氏の人物・作品を最もよく知る方々が縦横に語る。

(岩波書店WEBサイトより)

目次
大岡信の詩と真実のために
菅野昭正
大岡信・遠近
高橋順子
大岡信における想像力と批評
野村喜和夫
対談 詩人ふたり
谷川俊太郎・三浦雅士
付 大岡信・谷川俊太郎
対照年表(作成 三浦雅士)

「折々のうた」の思想
長谷川權
大きな驚き
吉増剛造
あとがき
菅野昭正

大岡信の詩と真実
菅野昭正 著
岩波書店 発行
2016年6月3日 2200円(税別)
ISBN 978-4-16-760000-0

これ以上ない語り手を持って、語り聞かされる詩人の軌跡



開館以来、当館コレクション展示室の「顔」ともいべき存在である「ムットーニのからくり劇場」。現在7台が稼働中です。文学作品の一場面を表現した人形と音と光とが織り成す数分間の物語は、観る者を異次元へと誘います。

今号は作者のムットーニこと武藤政彦さんご自身による作品ガイドをお届けいたします。

私の作品は、箱の中にいくつものギア・スイッチ・モーターが何十本もの色分けされたコードによって繋がれ物語を紡ぐ、いわば「からくり箱」です。そうしてみると、書物もまた幾重にも折り重なった言葉の歯車が、やがて流れを持ってセンテンスをなし、その行間に余韻と時間を塗り込めながら物語を紡ぐ、「からくり箱」であるかもしれませんが、でも、「からくり箱」であるなら、秘められた「からくり」は永久に停止したまま…。

さあ、ページを開き物語の歯車を回し始めましょう。

1 猫町 (1994年 原作：萩原朔太郎「猫町」)

猫好きの私にとって「猫町」は迷い込んでみたい世界である。

だが朔太郎にとつての「猫町」は全身の神経が張りつめるほどおぞましい不可思議の別世界だったようだ。

その別世界への道とは、朔太郎がよく彷徨った散歩道でもあった。それは幾何学的に鉄塔が並ぶ下北沢辺りの丘陵地帯だった。現実世界と幻想のような別世界との境界は、ひよつとすると、鉄塔と鉄塔の間に渡された高圧線であったかもしれない。

だが今はその鉄塔も、ほとんど残っていない。

2 月世界探検記 (1995年 原作：海野十三 『月世界探検記』)

戦後を代表するSF作家達が子供の頃によく読んだという海野十三のSF小説。例えば星新一のジュブナイル(児童向け)小説などを読むと、なるほどと頷ける。

海野十三が80年前に想像した月世界。それは今読み返すと、どこか懐かしい未来。でも、レトロで懐かしい未来は、けつして古くならない。



3 山月記 (1995年 原作：中島敦『山月記』)

信念を押し通し挫折を味わった果てに、山林に入り虎となった李徴。

人間の理性を剥奪され兎を食らう。でもそれは人間世界と隔絶した奥深い「山林」の象徴であるかもしれない。

「山月記」は、知性を照らす「月」と深淵未知の「山」が織りなす抒事詩でもある。

4 夢十夜 (2006年 原作：夏目漱石『夢十夜』より「第七夜」)

大きな船に乗り合わせた男。移ろい行く太陽。そして乗り合いの人々。それらは人生を物語っているのだろうか。船から飛び降りた男は、黒い波を目前に後悔に苛まれる。

だが、それは夢。

ここでは後悔も、また人生そのものも、夢…。

5 スピリット オブ ソング (2006年 音楽宮沢和史「書きかけの歌」)

詩人にとつて詩(うた)とは何だろう。もしかすると、彼は自らの詩の囚われ人かもしれない。だとしたら、その詩に出てくる「君」とはいったい何だろう。

詩人によつて生み出されてしまった彼女。彼女こそ、その詩の精霊であるかもしれない。ならばせめて、彼女を解放しよう。詩人の魂を救うだろう。

6 眠り (2007年 原作：村上春樹『眠り』)

村上春樹の小説には、よく鏡がでてくる。すべてをありのままに映し出しながら、左右反転した表層の世界。

そこに一瞬、決定的な違和感を覚えるときがある。この「眠り」の主人公も、そんな違和感に囚われた一人かもしれない。

無意味に繰り返される日々、消費、偏り、傾向。それを調整するための「眠り」。

「傾向的消費を治癒するために定期的に眠りが必要だ」としたら、そんなものはない「こうして女は、眠れない事を恐れなくなつた。」

当館収蔵品のご紹介 57

ムットーニのからくり劇場

7 アロンランデブリー (2006年 連想作品レインラッドベリ『刺青の男』より「万華鏡」)

宇宙に投げ出された男は、死を目前にし、ある想いを込めた。

やがて地球の引力に引き寄せられ、一筋の閃光を残した。

その光は少年の目に流れ星として映った。

少年は流れ星にどんな願いを込めたのだろうか。

2016年8月 武藤政彦

2015(平成27)年度事業一覧

1. 展覧会

展覧会名	会期	日数	一般観覧料(円)	観覧者数(人)	
◎コレクション展	(平成26年度からの継続)「下北沢クロニクル」	4/1-4/5	6日	200円	25,412
	前期「戦後70年と作家たちⅠ」	4/25-9/27	134日		
	後期「戦後70年と作家たちⅡ」	10/10-4/3	137日		
◎企画展	植草基一スクラップ・ブック	4/25-7/5	62日	800円	7,564
	宮西達也ワンダーランド展	7/25-9/23	53日	800円	8,586
	詩人・大岡信展	10/10-12/6	50日	800円	2,912
	第35回世田谷の書展 世田谷ゆかりの作家たち	1/5-1/11	7日	無料	819
	浦沢直樹展 描いて描いて描きまくる	1/16-3/31	65日	800円	39,687
展覧会観覧者数合計					84,980

2-1. イベント:展覧会関連

開催日	内容	参加者数(人)
◎「植草基一スクラップ・ブック」関連イベント		
6/13	ブック・トーク「植草基一と『金曜日の本』」 出演:クラフト・エヴィング商会(吉田篤弘・吉田浩美/作家)	115
6/20	レコード・トーク「植草基一が聞いたジャズ」 出演:中平穂積(ジャズ写真家・「DUG」オーナー)	207

◎「宮西達也ワンダーランド展」展関連イベント

7/25	ライブ・ペインティング&ギャラリートーク 出演:宮西達也(絵本作家)	48
7/25-7/26、9/6、9/21-9/23(計12回)	ゲリライベント ライブ・ペインティング&スペシャル読み聞かせ 出演:宮西達也(絵本作家)	1,017
7/26	家族で聴こう! 絵本の読み聞かせ 出演:宮西達也(絵本作家) 会場:祖師谷まちづくりセンター	114
9/6	スペシャル対談 出演:宮西達也(絵本作家)、真珠まり子(絵本作家)	147
8/22、8/25、9/23	着ぐるみ撮影会	130

◎「詩人・大岡信展」関連イベント

11/7	朗読会「ことばの海へ 大岡信を読む」 出演:声を楽しむ朗読会	85
------	-----------------------------------	----

◎「第35回世田谷の書展 世田谷ゆかりの作家たち」関連イベント

1/8	鑑賞講座 講師:田中栄子(読売書法会理事)	77
1/10	鑑賞講座 講師:川口青澄(読売書法会理事)	93

◎「浦沢直樹展 描いて描いて描きまくる」関連イベント

1/24	トーク「ひとり漫勉」 出演:浦沢直樹(漫画家)	180
1/31	トーク&LIVE「ポップ・ディラン聴いて歌って描きまくる」 出演:浦沢直樹(漫画家) 聞き手:白木哲也(ソニー・ミュージック)	159

4. 世田谷文学賞

募集部門	詩	短歌	俳句	川柳	随筆	合計
応募点数	77	174	282	270	59	862
入賞者数	16	16	16	16	4	68

6. 発行物

タイトル	判型/頁数	頒価(円)
◎世田谷文学館ニュース		
第60号4月 開館20周年特集「世田谷文学館クロニクル 1995-2015」/当館収蔵品のご紹介:植草基一関連資料	A4/12	無料
第61号8月 館長の作家対談:酒井忠康(世田谷美術館館長・美術評論家)/当館収蔵品のご紹介:深田久弥関連資料	A4/12	無料
第62号12月 館長の作家対談:中島京子(作家)/当館収蔵品のご紹介:齋藤茂吉『白き山』自筆原本	A4/12	無料

◎収蔵資料目録

世田谷文学館収蔵資料目録3 植草基一関連資料	A5/128	1,800
------------------------	--------	-------

◎展覧会図録

「宮西達也ワンダーランド展」図録(朝日新聞社発行)	A4変形/152	2,200
「詩人・大岡信展」図録	A5/128	1,300
「浦沢直樹展 描いて描いて描きまくる」図録(小学館発行)	B5/272	2,700

◎開館20周年記念企画

文芸せたがや第33号・世田谷文学館開館20周年記念誌	A5変形/128	無料
「金曜日の本」書籍『おもしろと』著:吉田篤弘	B6変形/72	1,600
「金曜日の本」レコード『天使も怪物も笑う夜』作:クラフト・エヴィング商会	LP/両面約60分	2,000

◎子ども文学館報告書

せたがや子ども文学館2015	A5/48	無料
----------------	-------	----

2/28 トーク「浦沢解剖学」

出演:浦沢直樹(漫画家)、Bose(スチャダラパー/ミュージシャン)、倉本美津留(放送作家)

3/12 浦沢直樹バンドLIVE
出演:浦沢直樹バンド

◎コレクション展関連イベント

6/27-6/28 ムットーニ特別上演会

2-2. イベント:子ども文学館

開催日	内容	参加者数(人)
◎どこでも文学館(展示)		
通年	世田谷文学館、区内小中学校、区民センター、群馬県川場村・区民健康村など	29,672(16か所)
◎ワークショップ コトバのミュージアム		
6/27、6/28	「ネイチャー・コラージュ」 講師:須藤正男(森林インストラクター・CONE指導者)	200
8/8	出張ワークショップ「世田谷ロケットⅡ」 講師:大嶋龍男(JAXA宇宙教育センター特任担当役) 会場:桜丘区民センター	72
8/22、8/23	「超ショートショート講座」 講師:田丸雅智(作家)、吉田花子(画家)	50
7/25-9/23	「おとうさんはウルトラマンスタンプラリー」	10,200
11/3	「ことばとからだ」 講師:日本女子体育大学 ダンス・プロデュース研究部	29
11/15	「ことばと詩」 講師:石津ちひろ(詩人)	123
1/30	「ことばとたんか」 講師:天野慶(歌人)	27

◎子どもボランティア探偵団

7/19、7/20	「ことばとだいち」世田谷文学館、高尾山北麓	68
8/20、8/21	「ことばとヒッチ」世田谷文学館	35
9/22、9/23	「ことばといのち」世田谷文学館、高尾山	51

2-3. イベント:開館20周年記念催事、連続講座

開催日	内容	参加者(人)
◎開館20周年記念催事		
5/30	柴崎友香 自作朗読会 出演:柴崎友香(作家)	61
6/27-6/28	セタブン・マーケット	3,430
3/19	「金曜日の本」出版記念トーク 出演:クラフト・エヴィング商会(吉田篤弘・吉田浩美/作家)	164

◎連続講座「大岡信の詩と真実」

10/10	出演:高橋順子(詩人)	96
10/17	出演:野村喜和夫(詩人)	59
10/24	出演:谷川俊太郎(詩人)、三浦雅士(評論家)	155
10/31	出演:長谷川權(俳人)	143
11/7	出演:吉増剛造(詩人)	85

2-4. イベント:人材育成プログラム、活動支援、共催事業

開催日	内容	参加者数(人)
7/28-8/2	博物館学芸員実習(6日間)	4
通年	中学生職場体験	82
通年	文学活動を中心とする区内活動団体の講座等を支援し、区民の生涯学習の要望に応える事業を実施した。	566
通年	文学館友の会、教育委員会、多摩美術大学らとの共催イベントを実施した。	1,250

3. ライブラリー・講義室・絵本コーナー等

施設	利用者数(人)
ライブラリー	7,173
講義室	2,243
絵本コーナー	7,997

5. 文学資料収集・保管(点数)

新収蔵点数	822
平成28年3/31現在の収蔵品点数	98,487
特別観覧件数(撮影点数)	330

7. 年間利用者数 ※一部イベント参加者は含まず

152,305

展覧会フライヤー



「詩人・大岡信展」



「宮西達也ワンダーランド展」



「植草基一スクラップ・ブック」



コレクション展「戦後70年と作家たち」



「浦沢直樹展 描いて描いて描きまくる」



「世田谷の書展」

平成27年度は開館20周年の年でもあり、例年以上に新たなチャレンジを試みた一年となり、利用者総数は平成26年度と並び15万人台を記録した。
最大の話題となった「浦沢直樹展 描いて描いて描きまくる」は開館以来最高の入場者数39687人となった。最前線で活躍する世界的な漫画家の初の個展であり、海外からの来場者も多くみられた。来場者の25%は10代、20代の若年層で、膨大な量の直筆原稿が発するエネルギーに「圧倒された」との声が多く寄せられた。4月から6月に開催した企画展「植草基一スクラッ

2015(平成27)年度 世田谷文学館事業報告

ブック」は、サブカルチャーの紹介者として1960年代から70年代にかけて、若者たちから熱狂的な支持を受けた文筆家の独創的な生き方に着目した過去最大級の展覧会となった。また、開催と同時にご遺族から寄贈されたコレクションを紹介する『植草基一関連資料目録』をカタログとして刊行した。
会期中開催した「セタブン・マーケット」は、散歩と買い物の達人であった植草基一のライフスタイルを体験的に紹介するための仕掛けでもあり、地域の博物館として「人と人」「人との」が交流する場を作ることへのチャレンジでもあった。古書、雑貨、フードの店舗に加え、当館の活動にご協力いただいた作家、デザイナー、編集者の方々からも私物を出品いただき、幅広い世代の来場者で終日賑わった。
「宮西達也ワンダーランド展」は、いま最も人気のある絵本作家のひとり宮西達也の作品世界を紹介し、子

ども世代の来場者が全体の30%というこれまでの展覧会で最も高い割合となった。
「詩人・大岡信展」は詩人として、評論家として活動してきた大岡信の業績を、初出品を含む創作ノートなどの貴重な資料で掘り下げた。企画展にあわせて実施した「連続講座」は谷川俊太郎、長谷川權、吉増剛造ら、我が国の詩歌を代表する講師陣により開催された。新春恒例の「世田谷の書展」では「世田谷ゆかりの作家たち」をテーマにして、書壇で活躍する世田谷区在住の書家たちに新作を披露いただいた。日本のお正月を迎えるにふさわしい、品のある落ち着いた企画として好評を得た。
コレクション展では、「戦後70年と作家たち」をテーマに前期、後期の2回にわたり、作家たちが激動の日々をどのように見て、生き、書いたかを収蔵コレクションを通して紹介した。
「せたがや子ども文学館」は「いつでも、どこでも」子どもたちを受け入れることのできる博物館事業を目指し、展開している。アウトリーチ事業などでも文学館」は、区内の小中学校、区民センターなどのべ16か所で開催したほか、世田谷区との縁組協定を結ぶ群馬県川場村での展示を開始した。自然と芸術の野外体験プログラム子どもボランティア探偵団」では、中学校、大学生のボランティアのべ47人が活躍した。第33回となる「世田谷文学賞」では、詩、短歌、俳句、



「子どもボランティア探偵団」



「セタブン・マーケット」



オリジナルグッズ

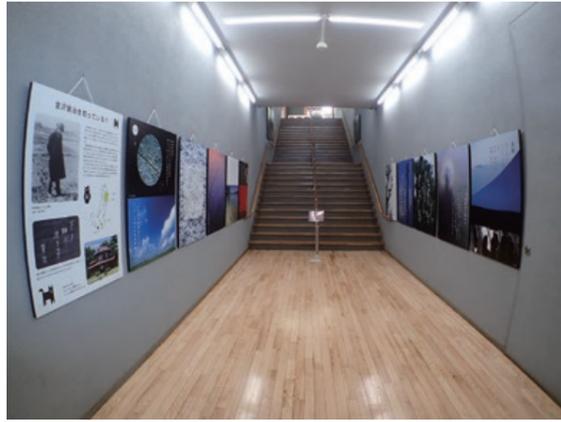
植草基一愛用Tシャツ(復刻)
右写真©青野義一



喫茶室期間限定メニュー

浦沢直樹展記念「BILLY BAT」
福砂屋キューパスデラセット

川柳 随筆の5部門から作品を募集、入賞については、高い評価を選考委員からいただいた。
27年度最後を締めくくったのは、世田谷区在住の装幀家作家のユニット、クラフト・エヴィング商会の作、制作による本とレコードの出版。デジタル全盛の時代に活版印刷の小説と朗読のレコードを出版し、本との接し方の原点に立ち返ることを提案した。
資料収集では、寄贈資料822点を収蔵した。「検家の人びと」をはじめとする北杜夫の主要作品の原稿やマブゼ共和国関連資料、ほとんど現存していないと言われた戦前の中野重治の原稿や昭和30年代の堀文子の挿絵原面を含む石井立筑摩書房元編集者旧蔵資料等がコレクションに加わった。
ミュージアムショップでは企画展にちなんだオリジナルグッズの制作、販売を積極的に行った。また、当館内での喫茶室、どんぐり(世田谷区社会福祉協議会運営)は開館以来、ハンディキャップを持つスタッフたちが活躍している。毎回工夫を凝らした企画展限定メニューを提供しており、館を挙げて来館者の満足度の向上に努めている。
なお、28年の年明け早々、初代館長の佐伯彰一名誉館長が永眠し、今に至る事業活動の基本方針「ジャンルの枠にとらわれず、幅広い層に親しまれ、生き生きと活動する文学館」を職員一同再認識する機会となった。改めて哀悼の意を表したい。



どこでも文学館 群馬県川場村出張展示「宮沢賢治 幻想紀行」



コレクション展「戦後70年と作家たちII」

コレクション展・どこでも文学館 展示風景



「せたがや子ども文学館2015」報告書



「浦沢直樹展 描いて描いて描きまくる」図録(小学館発行)



「詩人・大岡信展」図録



「宮西達也ワンダーランド展」図録(朝日新聞社発行)

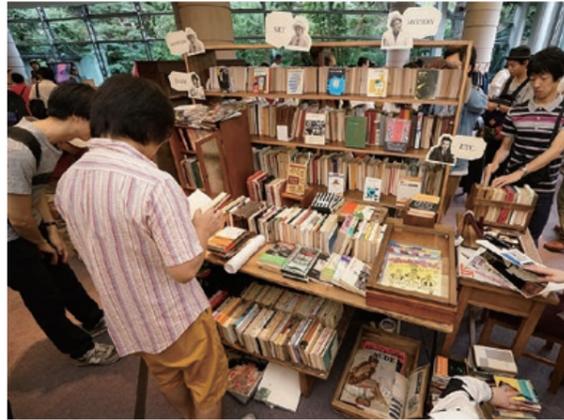


「世田谷文学館資料目録3 植草基一関連資料」

発行物



10月24日 連続講座「大岡信の詩と真実」出演:谷川俊太郎・三浦雅士



6月27日、28日 セタブン・マーケット

イベント



金曜日の本 レコード「天使も怪物も笑う夜」



金曜日の本 小説「おるもすと」

企画展 展示風景



「植草基一スクラップ・ブック」

子ども文学館ワークショップ



8月22、23日「超ショートショート講座」講師:田丸雅春、吉田花子



8月8日「世田谷ロケットII」講師:大嶋龍男 会場:桜丘区民センター



6月27、28日「ネイチャーコラージュ」講師:須藤正男



1月30日「ことばとたんか」講師:天野慶



11月15日「ことばと詩」講師:石津ちひろ



11月3日「ことばとからだ」リーダー:日本女子体育大学ダンス・プロデュース研究室



「詩人・大岡信展」



「宮西達也ワンダーランド展」



「浦沢直樹展 描いて描いて描きまくる」



「第35回世田谷の書展 世田谷ゆかりの作家たち」



企画展
生誕100年
映画監督・小林正樹

2016年9月15日(木)まで
2階展示室

観覧料:
一般800(640)円
65歳以上・大学・高校生600(480)円
障害者400(320)円
小・中学生300(240)円
*()内は20名以上の団体割引
*7月22日(金)は65歳以上無料

木下恵介のもとで『カルメン故郷に帰る』の
助監督をしていたころの小林正樹(1951年)

コレクション展
作家たちの
戦中・戦後

2016年9月15日(木)まで
1階展示室

観覧料:
一般200(160)円
大学・高校生150(120)円
小・中学生100(80)円
65歳以上・障害者100(80)円
*中学生以下 土・祝・日・夏休み
期間は無料
*()内は20名以上の団体料金
*障害者手帳をお持ちの方で
大学生以下は無料



企画展	生誕100年 映画監督・小林正樹 ～9月15日(木)	改修工事のため、2016年9月16日(金)から2017年4月21日(金)[予定]まで休館			
8月	9月	10月	11月	12月	
コレクション展	特集 作家たちの戦中・戦後 ～9月15日(木)				

世田谷文学館 休館のお知らせ

世田谷文学館は改修工事のため、
2016年9月16日(金)から
2017年4月21日(金)[予定]まで休館します。

館内の立ち入りができないため、展示室、ライブラリー、
喫茶室等、すべての施設はご利用いただけません。

世田谷文学館も開館から20年を過ぎ、館内設備の老朽化
が進んでいます。このたび、7か月休館させていただき、施
設の安全性と機能を維持するために、空調および配管設備
等を中心とした改修工事を行うことになりました。皆様には
ご迷惑をおかけしますが、ご理解のほどをお願い申し上
げます。

休館中は、世田谷区旧下馬地区会館に仮事務所(10月
～2017年3月予定)を設置します。転居期間の詳細につ
きましては、下記連絡先にお問い合わせください。

仮事務所連絡先

〒154-0002
世田谷区下馬4-27-14
Tel. 03-5374-9111
Fax. 03-5374-9120

*休館中も代表電話・FAX番号に
変更はございません。



休館日:
毎週月曜日(ただし月曜日が休日の場合には開館し、翌日休館)

開館時間:
10時～18時
(ただし観覧会入場は
17時30分まで)

交通案内
京王線「芦花公園」駅
南口より徒歩5分
小田急線「千歳船橋」駅
より京王バス(千歳鳥山
駅行)利用「芦花恒春園」
下車徒歩5分



公益財団法人せたがや文化財団

世田谷文学館 SETAGAYA LITERARY MUSEUM

〒157-0062 東京都世田谷区南鳥山1-10-10
Tel. 03-5374-9111 Fax. 03-5374-9120
ホームページ <http://www.setabun.or.jp/>

**せたがや文化財団の
催し物**

■世田谷美術館
[Tel. 03-3415-6011]

●志村ふくみ
一母衣への回帰

9月10日(土)～
11月6日(日) 志村ふくみ
《柳》2014年
個人蔵(前期展示)

●開館30周年記念 コレクションの5つの物語
11月19日(土)～2017年1月29日(日)

ミュージアム コレクションII

●神話の森 美と神々の世界
7月23日(土)～10月23日(日)



利根山光人《雨神チャックの世界》1961年 世田谷美術館蔵

ミュージアム コレクションIII

●ぜんぶ1986年—世田谷美術館の開館とともに
11月5日(土)～2017年4月9日(日)

■世田谷美術館分館 向井潤吉アトリエ館
[Tel. 03-5450-9581]

●向井潤吉 武蔵野の面影を求めて
8月6日(土)～12月4日(日)

●向井潤吉が描いた山と民家
12月17日(土)～2017年3月20日(月・祝)

■世田谷美術館分館 清川泰次記念ギャラリー
[Tel. 03-3416-1202]

●新収蔵作品を中心にII
清川泰次 線と色の交錯
8月6日(土)～12月4日(日)

●新収蔵作品を中心にIII
清川泰次 シンプルな世界へ
12月17日(土)～2017年3月20日(月・祝)

■世田谷美術館分館 宮本三郎記念美術館
[Tel. 03-5483-3836]

●宮本三郎の戦後—再出発の深まる境地への道
8月6日(土)～12月4日(日)

*宮本三郎記念美術館は2016年12月5日から
2017年3月末まで改修工事のため休館いたします。

■世田谷文化生活情報センター
世田谷パブリックシアター
[Tel. 03-5432-1526]

●『遠野物語・奇怪 其ノ参』
10月31日(月)～11月20日(日)
世田谷パブリックシアター
原作:柳田国男(「遠野物語」角川ソフィア文庫)
脚本・演出:前川知大
出演:仲村トオル 瀬戸康史 山内圭哉
池谷のぶえ 安井順平 浜田信也 安藤輪子
石山蓮華 銀粉蝶

●世田谷パブリックシアター+KERA・MAP#007
『キネマと恋人』
11月15日(火)～12月4日(日)

シアタートラム
台本・演出:
ケラリーノ・サンドロヴィッチ
振付:小野寺修二
出演:妻夫木聡 緒川たまき
ともさかりえ 他



■世田谷文化生活
情報センター
生活工房
[Tel. 03-5432-1543]

●留学生研究発表会
「JAPONDER2016—獅子になる」
10月7日(金)～11月13日(日) *会期中無休
生活工房ギャラリー

●7つの海と手しごと vol.7
「北太平洋と北西海岸
先住民のトーテム」
11月19日(土)～
12月18日(日) *月曜休
生活工房ギャラリー/ノ
ワークショップルームB



北海道立
北方民族博物館所蔵

■世田谷文化生活情報センター
音楽事業部 [Tel. 03-5432-1535]

●中川賢—レクチャーコンサート
「現代音楽の迷宮へようこそ。vol.3」
9月17日(土) 17時開演 会場:成城ホール
出演:中川賢—(ピアニスト/お話し・演奏)、
有馬純寿(エレクトロニクス)

●PPP秋のスペシャル LIVE!
9月18日(日) 14時開演
会場:世田谷区民会館
出演:パーカッション パフォーマンス
プレイヤーズ(PPP)

